歴史と変化の理論

1、成長モデル　ーー　一度限りの歴史

1ー1、発展段階論

　時間の流れの捉え方

　年表は、歴史を一回的、一方通行的な変化のイメージで表現したものである。

　全体は長大な帯状を呈することになる。

　このイメージに基づくと過去の出来事は映画のエンドロールのように次々に巻き取られていて、二度と再び目の前に現れる事は無い

　それに対して循環的、反復的な変化のイメージで歴史を表現すれば、さしずめ円盤のような形状になろうか、それは年表と言うよりは一定周期で同じところに針が帰ってくる、時計のイメージに近い。

　次に、同じ一回的、一方通行的な歴史の中にも、

世の中はだんだん良くなると考える進歩史観を取る文化もあれば、

逆にだんだん悪くなると考える衰退史観を取る文化もある。

　近代社会は、そして近代歴史学も同様だが、多くは前者、すなわち進歩史観、成長モデルで世の中の変化を捉えてきた。

(ただし、この場合は単なる文化や認識の違いばかりとも言い難い、人口増加の経済成長は実際に起きているからである。

ただ、それを良い事と考えるかどうかは文化や個人によって異なる)

　一方、社会制度のようなハードなものの成長を考える場合には、純粋な統計とは異なり、イメージの領域になってくるけれども、先人たちの多くは、これを直線や曲線ではなく、段階上のイメージとして捉えてきた。

　いわゆる発展段階論である。

最も単純なものとしては原始→未開→文明と言う 3 段階区分があるが、逆に最も精緻なものと言えるのがマルクス主義歴史学の発展段階論、いわゆる社会構成体論(社会構成史・生産様式論)である。

マルクス主義歴史学

マルクス主義歴史学には「下部構造が上部構造を決定する」と言う有名な公式がある(マルクス(1818 年～1883 年)「経済学批判」の序言 1856)。

それによれば、時々の社会の構造を決定しているのは経済、特に生産力であり、法律や政治、精神生活(宗教、思想、文化)などは経済と言う土台(下部構造)の上に立脚する上部構造に過ぎない。

下部構造は、その時々の生産力に応じて異なる形をとり、これを社会構成体とか生産様式とか呼ぶ。

そして、その交代は次のようなメカニズムによって起こるとされる。

すなわち、1 つの社会構成体は、一定の生産力の発展段階に対応しているから、生産力がさらに発展すれば、逆に足かせになる。この時、社会革命が始まり、下部構造だけでなく、それに規定された巨大な上部構造も崩壊に向かう。

社会構成体が目指したもの

原始共同体→アジア的生産様式(総対的奴隷制、貢納制) →古典古代的生産様式(奴隷制) →封建的生産様式(農奴制)→近代ブルジョワ的生産様式(資本制) →共産主義社会

この社会構成体論は、マルクス主義の中心的な理論として日本にも早くから紹介され、特に戦後歴史学においては主要なパラダイムとなった。

うえの発展図式は「世界史の基本法則」と呼ばれ、日本の歴史もアジア的特質をまといつつも、大枠ではこの「法則」に従う想定の下で、多くの研究がなされた。

その中で戦前に日本資本主義論争、戦後には封建制度論争(太閤検地論争)に代表される、いくつかの論争が戦わされたが、いずれも日本の歴史の各段階が、うえの発展図式のどの段階に相当するかをめぐる論争であり、うえの発展図式そのものを否定するものではなかった。

近代主義歴史学／大塚史学

一方、日本ではこれと似たものに、マルクス主義陣営からやや批判的に近代主義歴史学と呼ばれた立場がある。

主唱者である大塚久雄(1907～96)の名とって大塚史学と呼ばれるが、大塚は、マルクスに加え、マックス・ウェーバーの理論を大幅に取り入れた

ウェーバー(1864～1920)は「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」で知られるように、宗教を上部構造に位置づけたマルクスの理論を批判し、むしろ宗教が経済の発展を牽引するケースもあることを主張した

大塚も近代の担い手になり得る「人間類型」やその精神である「エートス」を重視したが、これはウェーバーの影響である

社会構成体に対する大塚のスタンスは、原始共同体の存在は認めるものの、近代ブルジョワ的生産様式(資本主義社会)の次に共産主義社会が来るとは必ずしも考えられておらず、ここでマルクス主義歴史学と袂を分かつことになるが、この点と先程の宗教の位置づけを除けば、社会構成体論にはむしろ忠実であった。

大塚は、資本主義が最も早く生まれ、順調に発達したイギリスの近代化を理想型とし、これを基準に比較史的に検討を行うことで、日本の歴史の特殊性を浮かび上がらせようとした。

つまり、日本の近代化がイギリスのようにいかなかったのはなぜか、を問うためである。

マルクス主義歴史学の終焉

ところが、戦後歴史学は、ほぼ 1970 年代前半をもって終焉することになった。

マルクス主義歴史学も、そこから分岐した近代主義歴史学も、これ以降急速に下火になっていき、それとともに社会構成体をめぐって議論もあまり聞かれなくなった。

かつては高校教科書の章のタイトルにも使われていた「封建制」などの用語もほとんど使われなくなった。

その原因を一言で説明するのは難しいが、1 つには実証的研究の進化がマルクス主義歴史学を引退に追い込んだ側面があろう。

日本中世史から一例をあげれば、封建制のメルクマールとされてきた土地に繁縛された農民と言うものが研究の進展の結果、どうやら中世日本では一般的ではなく、当時の百姓の多くは移動の自由を持っていたことが次第に明らかになってきた。

それに似たような事は日本史の他の時代でも、また西洋史や東洋史でも起きていた、要するにマルクスの理論が史実と合わなくなってきたのである。

もう一つは、社会構成体論は社会の内的な経済成長を重視しているものであったから、ともすれば国際的契機を考慮しない、いわゆる一国史観に陥りがちであったと言う問題点も挙げられる。

もちろんマルクス主義歴史家の中にも石母田正、江口朴郎のように国際的契機を重視する人もいたが少数派であった事は否めない。

1970 年代前半と言えば国際的契機こそむしろ社会のデザインにとって、決定的な役割を果たしたと主張するアメリカの歴史家イマニエル・ウォーラーステイン(1930 年～2019 年)の世界システム論(1974 年)も産声をあげる時期だが、そのような趨勢にあって、あたかも培養器の中で育ってきたかのような歴史像を提示する一国史的な発展段階論は過去についてはともかく、未来についてもはや有効な理論と言えず、無理からぬことのように思われている

まして、多くの社会主義国家が解体し、人類の成長もほぼ頭打ちになったことが明らかな現代から見れば、発展段階論は、過去においてはともかく、未来についてはもはや有効な理論とは言えなくなってしまった

未来社会を見通した実践的な理論としてスタートしたマルクス主義がその実践力を失しなったと言うことである

では発展段階論的な見方は全く不要になったかといえばそうではない。

少なくともこの世から歴史教科書が消えない限り、好むと好まざるとにかかわらず、発達段階論から逃れるられないだろう

歴史教科書の章立てには、時期区分が不可欠であり、時期区分を行おうとすれば、必ず発展段階論的思考を作動させなければならないからである

そしてその思考の多くが暗黙のうちに依拠しているのは、依然としてマルクス主義歴史学における発展段階論、すなわち社会構成体論であることも否定しがたい。

1-2　変化の階層性

社会構成体論が概して革命的＝急進的な歴史的変化を想定していたのに対して、歴史の流れというものをそのように一様にとらえるので出なく、水面に近いところと水底に近いところでは、流れの速さにもおのずと差が出てくるであろうと柔軟にとらえたのがフランうの歴史家フェルナン・ブローデル（1902-85）

邦題「地中海」，原題「フェリペ 2 世の時代の地中海と地中海世界」1949 年ブローデルは歴史の時間を三層区分し、

序文は三層構造の基底をなし、もっとも変化しにくい層が「地理的時間」で「ほとんど動かない歴史」「人間を取り囲む環境と人間との関係の歴史」「ゆっくりと流れ、ゆっくりと変化し、しばしば回帰が繰り返され、絶えず循環しているような歴史」→環境史

その一つ上の層が「社会的な時間」→社会史　これは「この動かない歴史の上に緩慢なリズムをもつ歴史が姿をあらわす。つまり様々な人間集団の歴史であり、再編成の歴史」である。

そして、三層構造の最も表層に位置するのが「個人の時間」→出来事の歴史、あるいは政治史

偉大な歴史哲学には、人間の意思や主体性が歴史を動かしていくと説くものと、人間の意思の無力さや個人という存在のはかなさを説くものの二種類がある。

1-3　移行期という考え方

時代区分も、分野ごとに違う時期で区切ったほうが良い場合もあれば、分野によっては線で区切るのではなく、ある程度幅を持たせ手考える方が好都合な場合もある。変化が緩慢で、その開始から完了までに相当な時間がかかる場合がある。そこから出てくる移行期という発想だ。

長期の１６世紀

変化の速度を考える

変化の質を考える